濵崎（はまさき）　優磨（ゆうま）さん
タイ（2018 年派遣）

2021 年 6 月 13 日（日）中国新聞 SELECT 掲載

※中国新聞社の許諾を得ています

出家で築いた信頼関係

袈裟（けさ）に身を包み寺院でお経を唱える

タイのサケオ県コミュニティー開発局に国際協力機構（JICA）海外協力隊のマーケティング職として 2018 年に派遣された。赴任当初はどのような活動をすべきか定まらず、時間だけが過ぎ無力さを感じていた。現状を打破するためには自分自身を現地化することが必要であると考えた。

タイでは国民の 9 割以上が敬虔（けいけん）な仏教徒であり、人々の生活に仏教がどのように関わっているのかを知るために出家を決意した。任地にあるワット・サケオというお寺を直接訪ねたが、僧侶の方々は非常に優しく日本人の私をすぐに受け入れてくれた。

出家生活の朝は早い。早朝 4 時には起床しお経を唱えた後、リヤカーを引いて町中をはだしで歩き、地域の方から「タンブン（徳を積む行為）」と言われる飲食物や生活必需品を頂く。数時間歩き、お寺に帰る頃には頂いたタンブンがリヤカーに乗り切れないほどの量になる。

「食事は午前中だけ」「快適な寝具で睡眠してはならない」などのルールもある。また、たとえ外国人である私でも、出家している間は一般の方よりも地位が上になり尊敬される存在となる。

短期間の出家ではあったが、タイのことを知ろうとする私の姿が職場や地域の人々の目に留まり、信頼関係を築いて家族のような存在になれた。その後、本来の活動である一村一品（地域特産品）の販路開拓支援にも地域の協力を得ながら貢献でき、信頼で世界をつなぐ大切さをボランティア経験で実感した。